

## — 1年・稲垣実践 —

— 「アサガオの声」とかけて「観察⇔愛着⇔お世話」と解く、こころは「きもちしだい」 —

生活科における子どもたちの活動や、それに伴う学びを理解する上で「あたま・きもち・からだ」、3つのレベルを想定すると整理しやすい。「あたま」とは知識の習得や言語による表現など、知的なレベルでの学習を指す。「きもち」とは学習活動に伴う意欲や喜び、不安などの感情であり、これが行動の原動力になる。行動に際しては、「からだ」を使ってきもちや意図を表現し、あたまで考えたことを実行する。ある脳科学の仮説によれば、あたまとからだはきもちを介してしかやり取りができない。だから、あたまではやらなきゃいけないと分かっているけど、意欲がなければからだは動いてくれない。また、私たちはからだの状態を詳細に把握しているわけではなく、気持ちいい、苦しい、緊張するといった感情によって漠然とそれを感じ取る。生活科の授業でも、子どもたちがあたまで考えたことをからだで表現・実行するとき、きもちがこもっていなければ表面的な活動になってしまう。また、からだで体験したり感じたりしたことをあたまで気づいたり、ふり返ったりするとき、きもちが動かされていなければ実感が伴わない。植物を育てたり、学校を探検したり、おもちゃをつくったり、生活科ではからだ全体で活動に没頭し、体験の中できもちが揺さぶられ、あたまでの知的な気づきへとつながる。きもちを中心にあたまとからだ統合され、初めて活動を通した学びが充実する。

「アサガオは1年生にとって本当に良く出来た教材なんです」と、どなたかが言っていた。確かに、芽が出て双葉や本葉が成長する過程は日々の変化に富む。栽培に手間がかからず、上へ上へとすくすく育つ。鮮やかに花を咲かせ、最後に種として次の世代へ命をつないでくれる。こうした多彩な変化を捉えるには、まず観察である。1Cの子たちは虫眼鏡を使い、葉っぱや茎を上から下から間近にのぞき込む。直に手で触って質感を確かめる。「双葉より本葉の方が緑色がうすい」、「双葉は表面がツルツルだけど本葉はザラザラ」、「においが違う!」。観る、触る、嗅ぐ、からだ全体で観察すれば興味と驚きが増し、特徴や変化への詳細な気づきにつながる。

その反面、「これからどんなお世話をしたい?」と先生が問うと、ほとんどの子が「水やり」と答える。逆に「くもりの日とか雨の日は、あんまり水をあげていないから」と、お世話をしていないきもちになる。実際に1Cの子たちのお世話は、水やり一辺倒だったのか? 注目は鉢を置く位置だ。芽が出る前は全員がテラスに整然と並べる。葉や茎が育ってくると、だんだんバラバラになってくる。一人一人が最も日のあたる場所を考えて置くからだ。時間によってはテラスに木陰ができるので、離れた東向きの壁沿いに置きに行く子たちもいる。そこにはアサガオの成長への科学的な理解と、元気に育てて欲しい願いとが確かにある。ただ、観察により知的な気づきは高まったのに、自分がしているお世話の意味や価値に十分気づけていないのだ。

「アサガオの声を聴く」ことは、観察で得た気づきを実際のお世話へとつなげる取り組みでもある。葉の裏を丹念に観察すると虫が食べた穴を発見し、「たすけてー」ときもちを代弁すれば、隣の子が虫を取ってあげる。ある子は授業前から一心にスケッチをしていた。葉や茎の色の違い、8枚に増えた本葉など、特徴を丹念に文字と絵で書き込む。精緻な観察が自分のアサガオへの愛着を育み、共感的にアサガオの声が聴けるようになる。表現された声には、観察、愛着、お世話、全てが凝縮されていた。「くきがげんきになったし、はっぱがおおきくなったし、げんきだし、むしをおいはらってくれたし、みんなとおなじになったし、むしがいなくなったし、したがむらさきになったし、あいさつをしてくれてほんとうにありがとう」(原文ママ)。